

ヤマトシジミと同じシジミチョウの仲間、早春から秋にかけてごく普通にみられる、みごとに美しいベニシジミです。モンゴルやヨーロッパの草原地帯にも同じ仲間がいますが、チョウ類

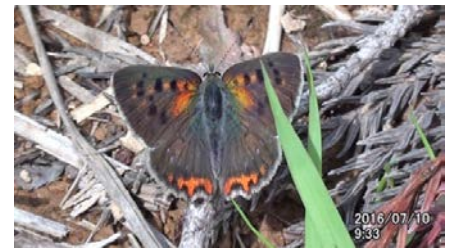


はおしなべて元気に飛び回るためにあるていどの体温上昇が必要で、太陽光を受けながら、羽を広げて日向ぼっこをする光景が目立つチョウです。ベニシジミの場合、太陽光による反射角度に気を配れば、びっくりするような金属光沢の輝きを目にすることができます。幼虫は草原や路傍のいたるところに自生するタデ科のスイバ（別名スカンポ）やギシギシの葉っぱを食べて育ちます。この食草は北海道から種子島までの分布となっていて、ベニシジミは屋久島以南の南西諸島には生息しません。デジタルカメラの普及によって、花やチョウの写真撮影を楽しむ人が増えていますが、ベニシジミはチョウ撮影のターゲットとして好適です。花の蜜を吸うのが好きで、その際、羽を存分に開いて、その美しいベニ色をたっぷりと見せてくれ、花の蜜を吸わないときでも、近くの草の葉っぱ上や路

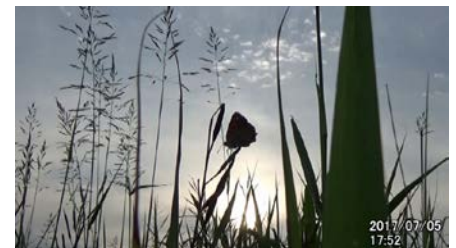


面にとまる際にすぐに羽を開いてくれる数少ないチョウで、添付の写真のような光景をいくらかでも提供してくれます。このときに日本産ベニシジミの学名は *Lycaena phlaeas daimio* 「daimio=大名」で、1891（明治 24）年に来日していたザイツ（Seitz）が命名しています。大名が存在しない当時にどんな経緯で命名されたのかを懸命に調査しているもいます。

ベニシジミは暑い夏になると翅表のベニ色部分が狭くなって一様に黒ずんでしまいます。これは季節変異とよばれ、幼虫時期の日照時間や高温続きであることなどが関係しますが、おそらく詳細な研究はなされていないと思われます。このように高温期に鱗粉の色が濃くなるチョウは少なくありません（例えばキアゲハ）。みなさんにとってなじみのあるはずのキチョウ（1992年、キタキチョウとして八重山地方のキチョウと分離された）では春から晩秋までになんと6度もの季節変異を示します。詳細はキタキチョウの項を参照ください。



ところで、チョウが夜をどこでどのように過ごすのかに興味があつて、黄昏どきの草原地帯を注意しながら散策してみるとシジミチョウの仲間やモンキチョウが静かに寝床につく様子をあちこちで観察できます。2017年の加古川河川敷でも眠る場所を決めた個体の観察を楽しみました。



2018年、Facebookに黒化型の典型例をアップしたら、ここまで黒いのはきわめて珍しいのでは？とのコメントがあり、実は、加古川で似たような黒化型を何度も記録しており、データを整理してみました。2009年には5月末にもうほぼ真っ黒という個体を記録していますがフォーカスが甘いのが残念です。過去の記録を並べてみると、2014年6月27日の翅表にひっかき傷がみ



られる個体、2017年6月21日のヒメジョオンで吸蜜する個体、そしてクズの葉上で休憩する2018年6月21日の個体などチャンピオン級の記録が複数あって、少なくとも加古川地区では決して珍しくはないことがわかります。

その他、交尾を迫る光景を撮影している最中に、別の♂がやってきて絡むというシーンが展開したり、チョウの自然観察中にはいろんな光景に出会います。ついでに美麗タイプについても過



去の記録を調べると、後翅に青い鱗粉が並ぶ個体がやはり目につきます。前ページの後翅青紋列が二重になった美麗個体はめったに見られないきわめて珍しい記録です。

